スピーチ内容を文字カードにして見直す

大分県大分市立南大分小学校
牧　英治郎

スピーチ内容は、確実に伝わるか

教師が自己紹介したあと、「自分のこと」について話す「スピーチ大会」の活動を提案する。年度始めには、どの学級でも行われる活動ではないだろうか。自己紹介の延長線上にある活動と考えてもらってもよい。

自己紹介では「印象度」が最も重要なポイントになる。つまり、話し手はどれだけ聞き手に印象を与えられるかを考えてスピーチ内容を構成しなくてはならない。ところが、話し手の「伝えたいこと（話の中心）」と聞き手に「伝わってきたこと（聞いたことの中心）」が一致していないことがよくある。ここに学習の芽があるととらえ、学習展開を組織した。

子どもが課題を意識するまで

実際の授業実践における一人の子どもの姿で具体的に説明したい。前述の「スピーチ大会」後の感想を出し合う中で、Aさんのスピーチ内容が話題になった。

Aさんは、体操選手として日ごろから練習に励んでいる。そして、ある体操の大会において見事二位に入賞した。そこで、「二位になった喜び」を中心にしてスピーチをした。

しかしながら、聞き手には「二位になった喜び」を的確に伝えることができなかった。ここで、Aさんは「『自分（話し手）の伝えたい思い』と『聞き手のとらえ』が不一致なのはどうしてだろうか」という課題を強く意識するに至ったのである。

スピーチの内容に着目させる

音声言語のままで話し合いをすすめると、話す態度や声量など話し方の技能面に着目する意見が必ず出る。これが話し合いの中心になってしまうと、なかなか内容に目が向かない。内容に目が向かなければ、五年生で指導するべき「構成」をとらえさせることも難しくなる。

そこで、Aさんのスピーチを文章に書き起こすことにした。このようにすると、子どもたちはスピーチ中に使用されたことばの数や文同士のつながりなどに気がつきやすくなる。技能の違いよりも文字化された内容の違いのほうが明確になるからであろう。

Aさんのスピーチ

Aさんは次のようなスピーチをしていた。

このスピーチ内容でAさんが「二位になった喜び」を中心に伝えようとするならば、⑧の文を強調すればよいことが分かる。

①私の得意なことは、体操です。
②去年、南大分スポーツパークで試合がありました。
③私は、試合のときは、ドキドキしてしょうがありません。
④私は、平均台がとても苦手です。

⑤でも、平均台の上でバック転をします。
⑥平均台の上でバック転は、とてもこわいです。
⑦試合で、平均台のとき、ドキドキしたけど、バック転が終わったとき、ホッとしました。
⑧結果は、平均台で二位だったのでうれしかったです。
⑨これからも、体操をがんばりたいです。

⑧の文の前後に間をおいて、ゆっくりと、他の文よりも声量を多くしてスピーチする方法でもよいだろう。つまり「間・速さ・声量」といった技能で強調することは可能である。

しかし、技能を磨く以前に、⑧の文が強調されるようにスピーチ内容の構成を見直すことが大切である。このスピーチ内容のままでは、明らかに「二位になった喜び」が説明不足であるからだ。

書き直しの視点をとらえたAさん

Aさんは、スピーチで「二位になった喜び」を伝えたいと思っていた。ところが、聞き手の大多数は「平均台の難しさ」や「平均台が苦手」という内容を中心にとらえた。このような不一致が生じたのは、Aさんのスピーチに「平均台」に関する内容が数多く含まれていたためである。

多くの子が理由にあげたのは、「平均台」に関する内容が、④～⑧の五文に含まれているのに対して、「二位」に関する内容が、⑧の一文にしかないことであった。

また、「平均台」については「バック転」や「ドキドキ」ということばでのつながりもあり、説明が多い。

さらに、「始め」と「終わり」については、「体操」ということばでまとめている。

このことから「二位の喜び」を中心に聞き手に伝わるように話すには、「二位に関する内容を表す文」を増やせばよいことが新たな視点として導き出されたのである。

Aさんは、「二位の喜び」を協調する内容として、「はじめて二位になった」や、「一位との差がわずかに○・一点であった」ことを増やしてスピーチ原稿の書き直しを行った。このことからも、学習でつかんだ視点をもって見直しをしたことは明らかである。

文字カードにして見直す

Aさんが、このような見直しをしたのはなぜだろうか。Aさんに、友達との話し合いで出された意見を受容する態度があったことは疑いの余地がない。

しかし、最大の理由は、話した内容を文字化して認識しやすくしたことではないだろうか。このことは、「書く」と「話す・聞く」の関連の重要性を示しているともいえそうだ。スピーチ全体の長さや一文の長さを短く設定していたことも見直しに有効だったと考えられる。また文字化するときには、一文ごとに短冊カード状にし、繰り返されることばについては、単語カードにした。つまり、文字化してカード状にすることで、比較・関係付けしやすくなったといえる。

五年生としては、「構成順を変えて『二位』を始めに持ってきて強調する」「『二位』を始めと終わりに入れて繰り返す」「インパクトのあることばを付け加えて印象づける」という考えも欲しかった。しかし、本実践では、年度始めという時期から考えて、子どもたちとともに導き出した結論を尊重し、内容を増やして構成すれば強調できることをおさえた。

まき　えいじろう　大分県小学校教育研究会国語部会研究部長・大分県学校図書館協議会事務局次長。日々、国語科学習を子どもたちとともに楽しんでいます。